

昭和16年2月1日 第三種郵便物認可
平成20年2月1日発行 毎月一回 日発行
俳句雑誌 沖 第20巻第2号



俳句雑誌[おき]

2
月号

沖
発行所

風狂

能村 研三

「まだ八十八：」

人日やをのこの眉の細づくり

左義長の火照り風狂の面構へ

川風にしばし真向ひ厄落し

屠蘇酌むをみな五人に我一人

林翔先生がこの一月二十四日で九十四歳を迎えられた。角川の「俳句年鑑」では現役作家の高齢順としては下村梅子、文挾夫佐恵に続き三番目に紹介されている。今なお俳句の実作はもとより、中央例会、千葉例会、同人句会などに出席いただきご指導いただいていることは私たち「沖」にとっても大変うれしいことである。今後もお体を労われ、お元気でのご指導頂けることを願いたい。

先日、私の指導する船橋の「浜町句会」の新年会で米寿を迎えられたお二人の方に逢った。そのお一人が自己紹介で、「まだ八十八：」と切り出され皆の笑いを誘った。俳句を作っている人は、普通の人に比べ矍鑠とされている方が多いように思える。やはり常に頭を使って、季節を敏感に感じているからなのだろう。

ところで、静岡支部の竹原惣一さんが句集『卒寿』を上梓された。第一句集『唄ぶくろ』に続いての第二句集であるが、この間静岡では前支部長の松島不二夫さんが亡くなられ支部の要を失った悲しみの中にあつて、気丈にかつ前向きに支部のこと

避寒宿眼鏡外せば想浮かぶ

鎌田 亮『雪間草』

雪間より心の封の開かれし

大川ゆかり『炎帝』

炎帝の威の中にある対馬かな

掛井 広通『孤島』

孤島より広がる宇宙淑気かな

伊藤 冬留『冬の旅人』

厳寒の旅人にある心意気

竹原 惣一『卒寿』

師の齢越え瞻望の初明り

を考えていただいたお一人でもあ
る。

先師登四郎が亡くなった九十歳を
目標においてそれが達成された記念
として句集を編まれたという。序文
は竹原さんにとって孫のような存在
の掛井広通さんにお願ひし、帯文は
子供の年齢にある私が書かせてい
た。『沖』には、創刊以来一回
の欠詠もなく投句頂いている、大柿
春野さんは間もなく百歳をお迎えに
なるという。

私は日頃時間に追われる生活をし
ているので、こんなに長くは生きら
れないと思うが、このような年齢に
達しても常に前向きに生きていくこ
とはすばらしいことであると思い、
大きな目標としたい。

能村 研三



未完

林 翔

きさらぎ

陰暦の二月を「きさらぎ」と言うが、その語源は「きぬさらぎ」で、春とはいえ未だ寒いから、衣を更に着る、それで「きさらぎ」なのだと言う。

もともとは陰暦の二月なのだが、転じて陽暦の二月をも「きさらぎ」と言うようになった。

大正天皇の崩御は大正十五年十二月二十五日。従って昭和元年は六日間しか無く、御大葬は昭和二年二月七日であった。その日に学校で唱った歌を、何故か二番だけ記憶している。

大御葬りの今日の日おほみはらひに

流るる涙果ても無し

如月の空春浅くごとらぎ

寒風いとど身には沁むふゆかぜ

冠雪の富士にのみ雲日本晴
陽も風も好きか梢の烏瓜
影曳いて紅葉酔また黄葉酔
霜の暁やよべの未完の稿照らし

「きさらぎ」を漢字では「如月」と書くのは、おそらく中国では「如月」と言っていたからであろう。俳人は「きさらぎ」をどう詠んでいた

早世の友数ふ冷えし指折つて

雲染むることは忘れず冬入日

昔なら丑三つ寒の不眠症

恋の唄胸に響かず年も逝く

一月二十四日

苦かも死かもともあれ九十四歳の春

もう豆は撒かず来たくば鬼も来よ

であろうか。先ず古俳諧では、
きさらぎや火燵こたつのふちを枕もと

服部嵐雪

如月や松の苗うる松の下

広瀬惟然

煤ちるやはや如月の台所

加舎白雄

現代俳句では、

きさらぎの烈風釘を打つ音す

白田亞浪

如月の昼寝癖つく病後かな

阿部みどり女

草入水晶如月恋が婚約へ

中村草田男

如月や人の華燭の銀の匙

渡辺千枝子

右は独身俳人千枝子の代表句と

言つてもよからう。

林 翔



蒼茫集



地球の出

杉本光祥

寒き日は大股で行く有為の山
「かぐや」よりいま冴え冴えと地球の出
知らぬ間に闇の来てをり酉の市
母まねて幼き指が毛糸編む
校了や師走の夕日待ったなし
羅紗屋てふ言葉なつかし冬めきて

ピタゴラス

楠原幹子

買出しの力士や博多の街小春
門口に僧を見送り石路の花
短日やきつねうどんに待たさるる
角帯を小粋に女鷹師かな
おでんの蒟蒻ふとよぎるピタゴラス
裏切りをたのしむポインセチアの緋

蟹の子

荒井千佐代

三方に山置く暮し胡麻を打つ
弔ひのきのふもけふも照葉かな
俎板の真ん中うすし秋桜
冬耕の胸の十字架ときに見ゆ
寒怒濤ロザリオ入れし旅鞆
蟹の子が母さんとゐるクリスマス

進化論

北川英子

ぴりぴりと夜気引き締めり獵期来る
芯柱の地中の丈や雪吊す
進化論の外れに海鼠うづくまる
風も日も枯野とどまるものなき
ポインセチアばかりが届く火伏札
ふと星の身じろぐ音や氷点下

舌 頭 渡 辺 昭

放念や身じろぐ鴛鴦の影流れ
跪く床ささくれて雪涅槃
舌頭に敲きて切字冴え返り
柚子しぼる妻の手力侮れぬ
蓮枯るる背筋伸ばせと風一朶
料峭や声かけて辞す先師句碑

天 鏡 大 畑 善 昭

天鏡や水鳥に夢むすばせて
烏瓜熟れ切つて日を欲しいまま
死顔のなごやかなれば石露の花
落葉搔く風の遊ぶは遊ぶまま
ゴングなきままの強打を初雪は
十二月号峰打ちに似し誤植

鶴 来 る 辻 直 美

見とほせる画廊の奥や十二月
遺句一句戴く生きてこそ初冬

父母よ昭和は雪の日の多き
鳥・魚の字画十一恵比寿講
鶴来るといへば山本安英かな
網膜に浮ぶもやもや古日記

ラ・フランス 安 居 正 浩

林檎一つ劇中劇のテールに
こんなことあんなことありラ・フランス
煤逃げに先手打たれてしまひけり
滑子汁すこし辛抱強くなる
綿虫の飛ぶに日暮は重すぎる
風花や引力といふ不粹もの

沈黙のかたち 辻 美 奈 子

行く年の大いなる背に乗ることし
年あらたなり純白の抗癌剤
冬至湯を出るうまさうな子の尻よ
電飾のひと色狐火に貰ふ
冬空のせつせつと青守りけり
くわりんの実拳は沈黙のかたち

潮鳴集



白鳥家族

大沢美智子

古 曆

掛井広通

冬うららカーブミラーに海の紺
昨日より今日の明るさ銀杏散る
刈株に降りて白鳥家族かな
小樽運河うみねこ一羽づつに雪
一瞬をしぶき白菜割られたる

どこまでも

古屋

元

寒灯の点滅ビルの鼓動かな
窓みがく冬芽の空を大切に
ポケットに眠剤どこまでも枯野
外套の背中は閉ざしたる扉
白浜に冬日売りをり土産店

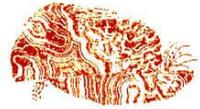
木の実落つ水底までの浮遊感
月に着く音を思へり秋の暮
バスタブも私も器冬に入る
過ぎし日は裏へと回す古曆
地下出でて冬の自然史博物館

紙の耳

甲州千草

電力になる前の水澄みぬたり
全山紅葉稀積濃いめの空一枚
紙の耳一気に落す寒さかな
吟醸の木箱の香り冬日和
飛び乗つて車内切符を買ふ師走

沖作品



能村研三選

小鳥来る巢箱のやうな浮御堂

満月や椎間板にふと浮力

十六夜や飛驒のからくり舞上手

金毘羅の五百段目の初時雨

指笛のかすかに聞ゆ秋の暮れ

枯木立豆電球の温からう

寒星やひとり消えたる連絡網

冠省と書きて余白や冬の月

一對の燭の揺れある神迎へ

ジーンズの白くほころぶ風邪心地

この村で死ぬると決めて大根干す

自販機に落す名水冬銀河

まな板になる木ならぬ木十二月

寒雷や片方だけのイヤリング

冬の日を溜めて空缶漂流す

東京

七種 年男

齊藤 實

東京

藤原はる美

市川市

諸岡 和子

北海道

梶川智恵子

奈良

南 敦子

綿虫の日に吸はれゆく流浪かな
また掃いて落葉に余白残しおく
裸木のきれいな息を聞きとめよ
働ける若さも少し柚子湯して
山祇の文かも知れぬ朴落葉
雪後の天青一枚に張り替はる
雪ふりて地中の寢息包みけり
死火山もマグマの山も眠りけり
干大根ほどよく撓ひ樽に添ふ
足の裏やはらかに踏む朴落葉
文楽の太夫に軋み雁渡る
敗蓮と言へど藩主の庭にかな
木枯の瀬戸大橋を横なぐり
撞く鐘の一打一願冬もみぢ
いつもより文字きはやかに初日記

沖作品 15句選評

*
能村研三

小鳥来る巢箱のやうな浮御常 七種 年男

先日の近江の勉強会での収穫。近江八景「堅田の落雁」で名高い浮御堂は、平安時代、恵心僧都が湖上安全と衆生済度を祈願して建立したという。湖上に突き出た渡り橋の先に建つ宝形造りの小さな仏堂があり、一見龍宮城を思わせる。目の前に開ける眺望は一幅の絵巻を見るようで素晴らしい。この辺りは現在も冬は多くの渡り鳥が飛来するところで、夕闇迫る頃、湖上に舞い降りる雁の優雅な姿を描いた「堅田落雁」の情景に、思いを馳せる雰囲気は今も漂う。掲句も「堅田落雁」を充分意識した句で、この建物を鳥たちの休息する巢箱に見立てたのもおもしろい。

冠省と書いて余白や冬の月 齊藤 實

冠省や前略は、「前文省略」といって、親しい間柄の相手や家族に出すときに使うもので、これまでの頭語の後には時候の挨拶がついているのに対して、すぐに本文に移ることができる。「前略」と同じように時候の挨拶を省略することが出来るが、「前略」よりもやや硬い表現となり、結語は「草々」と結び急ぎの文書やビジネス用の文書にも使われる。掲句は、夜一人になって親しい人への手紙を書いていたのだろう。「冠省」と書いたものの、中々相手へ伝えることが旨く纏まらず余白が増えてしまった。

この村で死ぬると決めて大根干す 藤原はる美

私などは、幸か不幸か異郷を知らないで、「一生一郷」となりそうだが、いろいろ住処を転々とした者にとっては、終生の地を見つけてそこに定住したときはその土地への思いも新たにすることだろう。昔は都会に憧れ大きな夢を抱いたこともあったが、地縁のあった村が次第に愛おしくなり、そこで簡素な暮らしをするのもよい人生に思えた。季語の「大根干す」が日常の平明な暮らしぶりを象徴させた。

裸木のきれいな息を聞きとめよ 諸岡 和子

全て葉を落した裸木も生物である以上、呼吸をしている。理科の時間に「光合成」などということをお教わったことがあるが、それは緑の葉っぱが光を受けることにより気孔から酸素を取りいれ、酸化炭素を放出するものであったが、葉が無くなつた冬の木々たちも、春に芽を出すために精一杯きれいに息をして生きているのである。

(以下略)